沈約の仏教観

石橋成康

南斉から梁代にかけて士大夫と呼ばれた知識人の仏教観は完全に解明されたとは言い難い。その理由としては、現存する文献量の不足や、彼等の仏教観が詩や賦といった文学的体裁で表現され、理解が困難であることなどが上げられよう。このような観点からこの時代の代表的知識である沈約の著述から南朝仏教の特質を探ってみたい。

六朝時代には范縝によって火がつけられた神滅・神不滅論の論争が盛んに行なわれた。范縝の主張は

(1)浮屠害レ政、桑門蠹レ俗。風驚霧起馳蕩不レ休。吾哀二其弊一、思レ拯二其溺一。夫竭二財以赴レ僧……云云

と述べるように単に精神が不滅か否かと問うただけでなく、中国の伝統的価値観・倫理観である「修身・斉家・治国・平天下」的立場から仏教を批判した。しかしこのような批判に対して沈約は、その著「神不滅論」などにおいて一言の回答も述べておらず、より個人的な隠世観から神不滅を証明しようとする。

(2)或朝生夕殞。或不レ識二春秋一。自レ斯而進、修短不レ一。既有二其短一、豈得レ無レ長。虚用損年、善摂増レ年。善而又善焉得レ無レ之。又不レ得レ謂二之不レ然也。生既可レ夭、則寿可レ無レ夭。既無矣則生不レ可レ極。

このように養生によって寿を延ばそうとするのは、例えば竹林の七賢の一人、嵇康が「修レ性以保レ神。安レ心以全レ身。」と述べる立場となんらかわりはない。嵇康にあっては「養生」を神仙説に求め、沈約はそれを仏教に求めた点に違いがあるだけである。更に「神不滅論」において

(3)養レ形可レ至二不朽一、養レ神安得レ有レ窮。養レ神不レ窮不生不滅。

と述べるように、仏教的立場に立った「養神」によれば「不生不滅」を得ると述べる。この「不生不滅」は空観的立場からの不生不滅ではなく、精神の永続性を意味し、嵇康が、

(4)至二於導レ養レ得理、以尽二性命一、上獲二千余歳一。下可レ数二百年一。

と述べるように、神仙説によっては数百歳から千余歳を得るに比べ、沈約の神不滅論に立てば「不生不滅」の無窮の境地が得られるとするのである。更に神不滅論の最後で、「大聖貽訓、豈欺我哉」と述べ、仏教によれば、自己の人生を後世へと延命することを信じて疑っていない。

しかし、このような養神＝神不滅の境地は万人に与えられるものではなかった。沈約が

(5)人品以上賢愚殊レ性、不二相窺渉一、不二相暁解一。燕北越南。

と述べるように、仏に至ることができるものは賢者のみであり、愚者は迷いの中に取り残されている。このような観点から神不滅論では「人有二凡聖一、聖既長存。在凡独滅。」と述べ愚者にとって養神から神不滅へと至る道はあり得ないとする。「形神論」において

(6)凡人一念之時、七尺不二復関二所レ念之地一。凡人一念二聖人一則無二念不レ尽。

と述べるように凡夫にも萌芽として仏性を所有していることを明ら

かにしてはいるが、このことから沈約が全ての衆生に仏性があると考えたとは言えない。すなわち聖に至るには聖を念じ凡としての性格を尽くさねばならず仏に至るには少なくとも賢者でなければならないことは先に述べた傾向と同じであろう。彼の「郊居賦」に

惟至人之非レ己、固物我而兼忘。自二中智一以下泊、咸得レ性以為レ場。

と唱う立場が彼の仏教観の底流にあり、彼の世界観も又、このような貴賤観の上に成り立ったものである。宋代から梁代にかけて官僚として日のあたる場所を歩いた沈約は、結局人間全体へと広がる救いを求めたのではなく「貴」に在る自己唯一の救いに終始し、全ての衆生が救われるべき大乗的精神から仏教を見たのではない。彼にとっては、自己の厭世を後世へと持ち込む理論として神不滅論があり、養生を主張する神仙説となんら変わりはなかったのであろう。厭世観から現世を後世へ持ち込む理論として仏教を理解した沈約は万物に与えられるべき慈悲心をどのように見ていたのであろうか。

釈氏之教義本二慈悲一。慈悲之要、全生為レ要。恕レ己因レ心、以レ身観レ物。欲レ使下二抱レ識懐レ知之類、愛レ生忌レ死之群一各遂中厥宜上。

と述べるように仏教の要諦を慈悲に求めた。究竟慈悲論において沈約は慈悲の具体的な実践として殺生を禁じ、肉食を止め、絹衣を着ることさえ禁じている。又、他者の生命を全うせしめることが慈悲の要であると述べる所に彼の養生観が伺える。このことから万物に与えられるべき慈悲が彼にとっては神不滅へ至る方法論として受けとめられていたことが理解できよう沈約が仏教の根本義を慈悲に求めた理由は彼の生きた宋から梁に至る時代背景にも求められる。宋書の自序によれば、父の沈璞は元嘉三十年に宋の文帝が皇太子劉劭に殺される事件にまき込まれ殺されている。この事件によって幼少の沈約は孤貧の中にあった。又、永明十七年、斉の武帝が没するや悪名高い鬱林王が即位し、彼の友人である王融がクーデターを計画して失敗し獄死している。このような乱世に生きた者としての人間存在に対する不安から自己唯一の救いを求める傾向を生み出し、彼の慈悲論を展開したのであろう、彼の人間存在に対する不安は

而俗迷日久、淪惑難レ棄。革レ之一朝則疑怪莫レ啓。設レ教立レ方、毎由二漸教一。又以二情嗜所レ深、甘腴為レ甚、嗜深二於情一、尤難二頓革一。

と述べる意識から出発し「釈氏の教義は慈悲を本とす。」とした思いが出たと思われる。

以上述べたように沈約の仏教観は、彼の知識人、士大夫としての立場から立論され、又その目的は、個人的な隠世観や厭世、慈悲論であったと言えよう。しかしこのような仏教観は、范縝の「仏教は自己中心的であり、功利的である。」と述べた批判に甘んじなければならないものであり、本来、般若経などに「諸法亦如是無自性、諸法和合生故無自性」と述べられるような、自己を越えた動的な立場からは遠いものであった。彼が「慈悲」の概念などを問題にしたとは言え、貴族であった沈約の仏教理解に対する限界があったと言えよう。

1　弘明集巻九・（大正 52. p. 57・中）　2　広弘明集巻二十二・（大正 52. p. 253・下）　3　広弘明集巻二十二・（大正 52. p. 253・下）　4　養生論・文選巻十三　5　広弘明集巻二十二（大正 52. p. 253・中）　6　広弘明集巻二十二（大正 52. p. 253・上）　7　広弘明集巻二十六・（大正 52. p. 292・下）　8　広弘明集巻二十六・（大正 52. p. 292・下）

（仏教大学大学院）